後七日ハ御悪獣出来とかのいふ事
いのりや道人みなのよろこひ富貴
衆でたのしくなりみちて一年
御祈り次第の年のわりさめよしそ天下
なれハつゝゐのとりらひんまさきや
あらぬまし

後七日　二事　根源云　立子院御修法（シュホウ）
ありけるよりもとるところのしも七年
金剛界（コンカウカイ）なれと明年ハ胎蔵界（タイサウカイ）
よろはなし修せらる後七日入御

阿波国文庫

修法とハ乙なりし天長六年に
弘法大師大唐乃内道場に准し
て吉祥院と云毎年正月にまて
承和元年より大師奏聞ありて東寺
の法とそ勅ありて御修法
一天泰平我ハ年始にて元日より
おこなひて八日より七日のあひた
吉祥院にて修せらるゝ後七日
と申なり禁中元日より白馬の
節会まてハ其日のおほやけ人沙門

まつりて八日よりはしまりけり
行事抄 名義集 内教式 阿闍梨式ハ
阿遮梨耶 唐にハ云軌範師 云正
行 能糾正弟子行
一年の初ハ此修中 春のはしめ
の御いのりなり修法なり小鑑国と
号して民士安穏にてさかし
来り一年のおほやけなりね
とみなるへし
東大寺諸ハ妙人はしめ給ふ

てさハむらさきくらめしあり ぬきて
のうらのしよくわう人あわせらるし
車紋繧　立涌のまへ織のう
さへうそのかれハそのさくハおほき
ともにうらにあしきといへり大臣
なとのおりはのもちひらまゐしれ
御たゝう
はしの冠ハ昔よりさかりにおほくあり
あらし右代の冠纓をうちもちらる人あれと
これをつきて今ハ用ゐし

垂纓　垂纓しましけ地ゐ乗ル人
て深つりうしか地ゐひとうか
ゑふして纓はらくとめし承り
てゝう
番長羽白菱さうあうこと梅花をさ
小鳥一双をうしろこのもえてにはせ
てまゐらせ人承り　御随身下毛
野武勝ゐおもせらまてり入ゝ小紀
り鳥はうらも入ゝのうちたうくりく一枚
小うらつうあまを蒔絵ゐたくとしゆ

きよ勝称かうのらきんしみこと也
給ひし武勝りいろいろのまかおもしろく
春にほをて色いやよしおもむき
まかりくれは藤も梅のえたに
ちりけとつゝてまうせうり武勝か
ト申しは宋のえくく梅枝さへにほひけん
多うとらりし御しは文粟すいくく
つえくのうくせ人おつのへと人也
しかみおよこさう梅の此は鳥と啼く
つゝえく御もうとくありもうら夜

のきぬてこふけへし夜の内裏をの
くらのさけしくてさうてくらの
南のやうみたちもへし初音のおもしろ
えくゝとめてにけて中うもつの
てまいらみまいりの石鏡つくのて音
ふ給とはきさかわしおもののけとさて
こうしるつちしてこひの御所の
高欄よりもく添ひおさまれは庭にか
くにうきくすしてまうりそく初音とい
色とし当代よれのくれぬ御子の音よる

もしもあまおほひのもとをちらしもてあれ
鷹はよのつねとも御鷹の
とりをよしあらへしとや赤花は鳥
つかひとへいろかはよりかんなり
月ちりは梅のつけ枝ありて雉をつ
けてあふさあふて杉の花はさらしを
まかなへいへは紙をもちりよ尺え
そのほかの花ハくちしらぬよや
苗牛実白　定年ふし　石蔵冠二十
万代の縁　千流水の一流し

付鳥枝の事　柴高七尺五寸為
通代柿木よりハ棄せしめし
てうちかけてよもやおひらかれと
鳥付の柴也云なり一流りは
多りん柴とらかのへ草のつられ
立枝とつけて雄をたまはりて付
て雌をもちそて付けて年あまてハ
雌をたまはりて付けり春ハ雌の
しやうりんもちかかり　付やうハロ
傳あり或ハ柴の用といふへし春ハ

梅枝ハ紅葉し付る事常の義也
太后大饗のときもちゐ初
宮乃鶴雉を人々につかはす時節作
法し又鷹飼よりも人々のもとへつか
はすにハ二つの人乃木乃えだにとり
める法式もありし事とおもふ
らして付るや一双とはくるやう
手つかひ人に奈ノ道則流之回
鷹飼乃雲?乃流に木にて付
宮人雌雄一双と付るし又太后大饗

元服つくれば時節とすれ
義家の人違よりハ根の義ハ小松に付
弘し義氏兄弟流鷹飼よりも人の
付し人雉をとらへて木に付るも
鷹をとりてそはに付るもあり
一流よりハ松に鴨つくりしをわり
小鴨し義家の流より不付也
新古鷹飼乃枝に付るをハ紅葉
のえだに付るもあり 萩とハ竹の枝
に付るとし 十月に及ふとりは木に付し

さりゆへ前句の武久か流し並見さ
河海抄に
下毛野武勝　続日本記をとよへ
下野国とも下毛野国とつゞまり
姓にては氏となんなり
然しか　本作よりはしはをすなり
小さりてこそしくとさうそくとも
しかとらふ
當りけるゆへ
又竹當に秋とへはけるをつゞしとて

さおさたくぬ人とをつけるを
わするゝひのも
紀の有常けるとしへ　定らず下
是本の句のみな武勝が紀り
名つくるを入れと云に対して
云なり
前物なり　むしはかれおれは
まうらこそあんとやゆかはしくなる
清らなるおとこ出月なりけり
按此つゞりえたるに雑をつゞけてことく

もろこし
まつたのむ君かへるにとある所ハ
さしもまつのふくまなく
さしみちてまつのさかえれハ
いとめてたきやうなるのこつり
のよ縁語なり
竪蔵乃岩本槙松ハ寛平宮方之人の
つらゆきの時代の人なれハ一年後にうかと
しかも一寸貫之をしるしとしのそなえて
さて御しるし寛平ハみてうしよ新氏なり

久保さかうと有る説ハしもしもやな説
承りちうどれいし松おんへ侍る古今
の和歌　月をかて読せるめしぶ
し見て心うしも人ハちゝにわりいうと
よらん浦乃みち古今和歌の中うちそう
けさひろりをみれとそのまうしうら
いたりし西行和なとしてもまいりてまめ
さいてやう個しいのうしけうい見ん
しく紛ちるし今昔川院和歌とて集
とりにかまて入てる人ハそうすまし時

清輔百首歌よみけるのうちの
乃翫しるの御前のなをて書しる
白らきくりぬこに翫んしる承ぬ
まれありそへの君にあつ亭杉り他
文治帝なといふしらへて
是ハなりもし　　　稀本言実
ぬるなり
叢卒　三条浄正門院歌王第五
男し故号ス在世中称ト忠平ニ
師也定时寛方十一月十三

日記ニ付テ国ニ卒ス　藤原定家ハ中
納言にてなりしへて禁中にて紅
葉の色をめあわて紅をとう
杉にそろこちさなよりて紅
とそてまでとも奥羽へつつき
歌則詠にて卒ス
前大和尚　法性寺関白忠通公子
諡ヲ慈鎮ト　前大僧正九山て
月とめて　めて八坐もろ他し
土御門院御製　今あ門院とへ後の

院のころほひ常盤井の相国実
氏公の孫中宮の姉子と申西園
寺公相公の御女（ムスメ）し

籠ありしなかりしの押領使なりし云や
おつかのつかさそれらおほかたをとも給ひ
小いとしきくまりとし朝し〻にあまた
けつかさてこのかりけ年めさし〻
なりのあひたに縫のもとし人をあらう
かう見もらうてめされしとそ給ふさき
まてもそれゆかしけり鉄のかうし共二
人まて命をおしまぬものにて皆
といひしてかりいとよりは身にしみて
思ふつ家にもしうちゐてひとへにかなて
のしまかへいなかのひとことのかれにてけれ
そのまへておさまりつゝもとめてまさりて
ぬといのそて手にかりふく給をいてしぬ
きへての御書をとゝめさせ給ひけり

押領使　東鑑七曰鎮守府将軍
兼陸奥守従五位上藤原朝臣秀衡
法師　出羽の押領使基衡之男也

凡四巻平文治二年十月又乃
述作を徒て為白羽浄奥押紙之
菅孫六郡
六根とは　六大根とし和名曰爾雅集
注曰蕃音福和名於保祢俗用
大根ノ二字ヲ
書写乃上人ハ法花をよみの功徳を
つみて六根浄をゑたる人なりけり　眼の
うちをいへれたるし　鐵乃かね城
さかてまめる菱ゑゝとものつゝしとな
みとこゝほそれへてゝうぬとまとし
とこのけして我とはなてゝりしたれとんと
すゞ地のれといひのりたるをめをう
のもろしとあるとも　ゝはゆうふりもう
まのはやうわへいうなりて様のもうす
まとものあらしのしゝゆへあの
そとみこゝのの

書写の上人　性空は平安城ノ人従四位
上橘善根ノ子也

六根浄　眼耳鼻舌身意を六根

とし
をやしなはんとて　世説曰魏文
帝嘗令東阿王曹植七歩作
詩不成者當行大法應聲便為
詩曰煮豆持作羹漉豉以為
汁萁在釜下然豆在釜中泣本
自同根生相煎何太急帝深有
慙色　曹植字子建魏曹操子文帝ノ弟也
元應の清暑堂の御遊に玄上はうせにし
比菊亭のおとゝ牧馬を弾し給ひける
に座につきてまつ柱をさくられたりけれ
はひとつおちにけり御ふところにそくひ
をもち給ひたるにてつけられにけれは
神供のまいるほとによくひて事ゆへなかりけ
りいかなる意趣かありけん物みける衣被
のよりてはなちてもとのやうにをきたり
けるとそ
元應　後醍醐の年号也
清暑堂　於大内中央曰大嘗會又
節會於此所行之

壷

玉ハ此名し壷と此二字とまた
清てしもし蜀しきしもし由緒し

楚树抄曰壷とハ黒代の寅也し壷中
受ノ所尉子ヽ根源ノ様人不知之樺祢ノ
亂負敏渡唐ノ時所渡此巴二面
其一者紫檀直甲也大宋人曰紫
檀者大様不可已六七寸ニ直甲
之象不信々 但此甲非只物さ紫檀ニ
也元寸比巴云躰云節不可読未
曽有ノ物也為靈物人為跡之時

有貴人如何わよへもろこしより入ル人
夏皆著直衣人也霊物中越他ニ
以不浄ノ手不可取背ハ無覆自
通此有沙汰有覆并臺 紫ノ唐綾 無文臺ヽ
捐臭 以琵琶ノ靈驗内裡焼之時先
出撥面文消所ヽ有赤色不知其ノ
繪代ヽ有沙汰未決後房之曰良
通云此巴移玄上彼撥面文不可
遠彼唐人寺毬敢也或曰玄象
呑青鉢之水所謂号玄象ト又

玄上宰相献延喜帝、仍号玄上、両
説、但所音隠入道付玄上説
牧馬　撥面ニ牧馬をゑかきたるよりつけ
たり古事談曰牧馬与玄上一双名物也
時人不弁勝劣、爰有信義 時雅三位息 信明
時雅三位息 両人不知勝劣物信義弾玄
上信明弾牧馬、先甲乙信
明弾玄上、信義弾牧馬、其声
雲泥也、故時人皆云信明超信
義、玄上勝牧馬云々

菊亭のおとゝ　右大臣兼季公也
ちくとさるものなれは　柱は字也
ことちにはあり　琵琶にてもちうと
いふ琵琶のちうへりとよりいふ異を
めてあやしの絃ともの柱をゆるかり
こなたなれ　絃被とゝ女の名
をやよりやそて西京へなしもうら
みちもちもゐとわらとれをまかせ
てありのつまのわれとゐ人こそ
なけきもしつるけとさてもこの

ころは人の家はくさきそゑて有き
んとおもふ人をはよみつる人の中より
ありひとつはこまへそれをうくれ
おほかりやよいつのおもくさいふ
人のいふをも月にみな物を秋の
古き経はしるをかきあつめてのいけやあ
つまりしおほくていけとはおりのいく
縁とも内へしくありしこそのもおもき
思ひとりくおもふや
これしたまうをの井くゐあそりよ洞窟

の多き　硯に筆のおほき持仏堂に仏の多き
せんざいに石草木のおほき家の内に子孫の
おほき人にあひて詞の多き願文に作善
多く書のせたる多くて見ぐるしからぬは
文車の文　塵塚[チリヅカ]のちり
前栽に石草木のおほき　庭に亭樹怪
ろんとあつめてをかれたるは無下にいやしきとを
よりし多きところあるへし
文車　ふる事は牛車にありつるをもとし
小車にありて失火のときのうたかいやすし

いさんうめの男し

ちりつゝ　ちりとをりつゝ而し

世にふりつゝ又ふりし御はあのうたいやなれ
くは名有りしわかふもとをて人は物とのみ
おもひまして年月をたてさりのて〳〵うり
われは公さなすれ小ふ候すて常行て云さわ
わきいやさて定りみちし此池のとまれい
みしたるうしおそろす地へのうち近知ぬへ
そろし非のやしよみとし近きまゐ人へさり
よ絵をあこさん吾にふるしとみりけしへ行す

ときら高地しら所ふそら所をくらよまゐて
云ちらんはやそてらたるうし常也みられ
後うらんは公のすうらんのおのしますよ奥
此わしあこめたそてひふくは人の有りしにいわう
をくおりし而井おありたらしもくね
よろしてまなりし清ましく会て行り有りと
いあそうしたのし目りへ曲同をやしよいい
もわり有りしは人いさらわりぬれまゐ人の奥
すり盛云は到らり行てならう物をしいさん
し冷すりて此ゐさりあしに従人よさんすまれ

ていはまりあへしといふくらはる定
こゝおれ世なりたつてみゆるかくし
こゝろ本末よくに四方さらんと縁なる
へつ上下万の人忘物なり八年あたる
くさのこゝありこれ人へかやしまる
ころいるへし也　仏術の事権者の
侍従さのこゝ任世さる人存とあれ是を
世俗の塵芸を念仏　任しさるとおこる
ちつもわしあてとせんきれて大
こゝへしくわひらのてゆくへり任

せはみなるひわさるへしれ
わさる義　無霊　河海に　無間　深縁類
衆に　深民さう意よあはれみ見とさへ
かつこあり
あくるふ　頑の字し
ふれたるし　浮云としれ朝
くりそことし
異の列しあこめおて　深民事ふ
いきのゝさうあこめてくるゝを
あし年を終しさうこし

はなし　ましませ
されハかやうの事ハまよひとおもふへし
論語述而篇ニ子不語怪力乱神ト
儒術の書籍雑書大傳紀　仏説よ
於ても我家所の佛菩薩鬼神
は術変書物文術明の不測なる
ことその外権者化身乃さへ人
あるかたの仏法として反対もなく
へいみそ一つ〳〵ゆゑありとのさめかくし
このふ候し

蟻（あり）是をいふかき内すりの東西すい
これ南北みなもこれ高祖ありていふ
祖あり老人ありてこれかり所
ありと思え家ありゆゑくり　い給く
朝夕すくいくつかむしことつなくにまた
やさ生蛾むさかり利をとりあくまむ
されてゐるしかとやうのそうにこれ
まゐ給ふ所ニて老ヲ死しにありも
こころせすやうふしく会と乃ゐ
りとまのし〳〵さとまゐりあのくるにの

そのしのうらんむしとなりわかれの色を
かまへ成なくまん名利り なかり給へく
先途をもちて夷事成りなりたる事を
こ給ひなれんへ人の文にこれくとかのすへし物言
給ふのらんよりとなるのしく変化の理を
せう給へなり

蝶のくさしにあやまりて　文選よ
蝶同しとなり　変化の理を荘子に
曰、已化生又化死、生物哀之、人類悲之
注、物初生本無而有、又化而死則無既有

無同乎一理而人物之類自以為悲哀
愚惑也

はかなくもうつし人はいくたひかしらんきて
あらくそもしかはかのかたくよそれ
世をたえても色はへかのかちらゆうはそれ
てあらくの風もなく人おもしとれとかよ
うれしくふたつるのてとなるよりかあ
られへよとかれ物りかくての一家はう
らん一家はよりうへりくのてまうれはことく
なし家なんてはりよあるとて得失風むかす

なしまとのゝよふなる目酔の中に夢を
おもてなしけていそかはしくありてられ
もてあそふ人みなかのこゝろいまた
の道もしらぬえんをこゝろにてやと
ありしにまかりしてみをやすく
せんとおもふしくものにしるいのへ
それ生活人事技能学問等の諸縁とや
めるしく摩訶止観にも作る

生活人事　止観第四曰縁務有四一ニハ生
活二ニハ人事三ニハ技能四ニハ学問ニヨリ　生活ハ

身命をさゝへるの産業し　人事ハ人ゝのれいを
よまし〳〵あつかうし　技能ハもろ〳〵の藝
能し　学問ハ門外の書をまなふしやう
ハしをみる秘かのさはりとすれハとて
やめよとし止観の訓し
世のなかにをかれやうあつかうみ歎をを
よるこのあまて人なかくゆへとるの
中にも又法師のまじハりて心入たるを
たてすそれはもとこみ中まさる人にも
わつらし法師ハ人よりくしてわつらふ

世ハおくれてさきやくすゑ　呂大臨か云
いのんて　うきよとよろこひをおもへる物ハ
歌華（シヤウ）絃歌乃あそひをこのむを見る物ハ
婚（コン）礼（レイ）冠礼祭祀の時をしり
世中よろつの人のまてわけるひくさにいて
のありいろく気ふへあつかひ人よく
楽用して人をふまる中世とのこさて
あつまるけれ孫こしたてまつるすゑ
聖経師すてき　世の人のとへりかしく給
こそいそてかうへしきえんとおゆる

まそういのちほめう
今ほうのねらものあくし是とかの糺
そあをてきすしとうそうとらけ○世にも
うらそうまてあうる人へゆうくし今更の
人ならのあつ時きつりしにかのはまそうつと
らき物乃名をてけ乃うちとちうくり
かのあうりし月見あひ世まるのすこして心
あてあへ人りつえほんともてるね　世たまし
をよううね人のゑすしほうつやし
とやうのね　新楽府よ時世粧と書て

いぬやまをてくしよめり
行末を入てぬ中ばしろくしきさん人き
あり候らはてさのきありかりやはらかに
く思ひさしおさめ人をくきありの
道にも過てありのさしいへ人いもれさ
まほせたりけり哀おもしあきときつ
もいみしくありけり哀おもくすなりよ
くつねまの人そ道にければ必口ばやくとて
ぬくさらへいそぬてくいかしるれ
せたりけれとて　口おもく美人とふ

口てん　口おもく　礼記ニ口ノ容止(スカタハシヅカナリ)と云主人不問
容不先挙とい人つまをつりもの
人ことに銭多ふしてけるとりてここれなら
法師は世にんて抑さて心のもてはるかく
もんたいれ仏法をそれてこさそそくし道
説し普経ありのしあへうされとなるら
なげいさのまとり道にれるなれ人のあなの
つまらくし法師のきにもありしと本郎
ならし人へまんさ多すまてさしるへて武いとこの
ひ人おやうり百文の銭く百文の時もて

いよゝ武勇乃名を定てゝしつとも申へき
運ぶ事もしゝあるゝゝ时勇者よあるゝ
もとより人の兵つよき危きへまゐりて
信ぜし敵をしりそくる事を廻もらして後
始く名をあらはし人へ美なしゝ武者ん經
へ武しおこる人へ人倫よとゝく會敵あり
くなれ事ありまりそのゆ家よあらんへ好くく
おそれなきさましし

夷 家にてハ四番め武士をさし　上半郎
为し夜上人ハ四位五位六位わり　武士を

むしんおうり　左傳衛公子州吁嬖人之
子也有寵而好兵又曰州吁阻兵而安忍
阻兵無衆安忍無親衆叛親離難以済矣夫兵
猶火也弗戢將自焚也　百たひ戰て
孫子謀攻篇百戰百勝非善之善者也不戰
而屈人之兵善之善者也　山谷詩百戰百勝
不如一忍　兵ほとに失こさへまゐりて　司馬遷報
任少卿書曰李陵与匈奴單于連戰十有餘
日一國共攻而圍之轉鬪千里矢盡道窮救
兵不至士卒死傷如積陵未沒時使有來報

漢公卿王侯皆奉觴上壽後数日陵敗
歙子降られ　通鑑綱目第二ニ刘友益書法ニ
曰七國之君其結立死之上し　執虜次之以
帰次之獲次之降為下　人倫よき會
歟よちられ　孟子離婁上篇曰争地以戦
殺人盈野争城以戦殺人盈城此所謂率
土地而食人肉罪不容於死故善戦者服上
刑連諸侯者次之　荘子説剣篇曰庶人之剣
蓬頭突鬢垂冠曼胡之纓短後之衣瞋目
而語難相撃於前上斬頸領下決肝肺此

庶人之剣無異於闘鶏一旦命已絶矣無所
用於國事今大王有天子之位而好庶人
之剣臣竊為大王薄之

屏風障子なとの絵にも文字をかくこと
御筆やうしてかきたまふかあり
もあるのあるしのほとりにおもひあつき
人のこころを潤色してもいとうつせらるて
こハかなふさのことにも絵とおもへしとれ
もわれ様せさらんとかゝてかかす人は
られゆまにしすなかつへしかんとて用ゐさ

こともしるしをかりてこれをうつしおきぬるを
いみなりかれかしるしやうにそえしつる
をはいへをきて物しつのもよりなき
なり

うすものゝ表紙にして様をうつしみし
ことくのいろはふ紐かうくをとりて物をかへん
ちきよくは殿てんの軸は貝すりにて清こ
らいみしかれとは御しらう日をさらてむ
あるしらう一部とわたる草子なるのかすしや
みとおしはかなしといふて弘龍信部か

物をみるしきて一具ありそのつんとも
いつくむ気りのしもつかなし奥たに
しうちまれとはいみしと申しかは
ゑしすりもんて御て書とものつとのか
あまそうはかしさしらのり色のつまと
みとさてくしはしかうはたりかうてこ
ゆかりすなり内裏遣してみる
すつらさて見てを御をまつりと試
人御し天皇のつれつ内外の女御を
章皇のかけるものなし物九

うすもの　深ふむのちく有れへてし

羅乃字をうすものとよめり　俗名

唐韻曰羅 音行又此間云 良一云蝉翼 綈羅しられたる

なれとしろたちをわり　囉斎の囉

乃ゝ名のとし　羅ハ今紗なとに似るる

ゑし

頓阿　小野ハ文の名にてなし

さうれこゝわんし　らでんの軸 螺

鈿軸ハ巻物のちくよ貝をはり入たるを

世俗上よ云いしやうのあをかやつる

多のうぐんらでんの貝ふはまくろあむ

ゑそうしるちて　弘融僧都

いみしけれ　深きしんのうちと

いふ初しおろりゆるゝゆくつのこ

内外の文　内典外典し佛語を内

典とし　儒書百家をか典とえ天台止

観りを十解ゑうつ之経のけそ詩を

三百篇なうつ六篇亡し周礼ハ冬官を

官のけ大学を格物の傳をなくる轍れ

たし

竹林院入道左大臣殿右将政太臣ふなりり給

らんになにのとゞこほりかおはせんなれ
ともめづらしげなし　一上にてやみなんと
て出家し給ひにけり　洞院の左大臣殿この
事をかんしんし給ひて相國の望おはせ
ざりけり　亢龍の悔あるとかやいふこと
侍なり　月みちてはかけ物盛にしては
おとろふよろづの事さきのつまりたる
はやぶれにちかきみちなり

竹林院　西園寺公衡公竹林院左府と
号す　一の人　一上ハ左大臣のこと也

左大臣関白なれハ天下一上也　前官の
時内弁をつとむへし　洞院左大臣　洞
院實雄公號一位左大臣山階と号す
相國　太政大臣のことなり　亢龍の悔
易の乾の卦上九ハ亢龍也　有悔象曰
亢龍有悔盈不可久又曰亢龍有悔
与時偕極亢之為言也知進而不知退
知存而不知亡知得而不知喪　月
みちてハ　易の豐の卦に日中則昃月
盈則食天地盈虚与時消息　釋名に

云月ハ缺し満則缺(カク)　ものさかりにし
ては盛者必衰
法顕(ホツケン)三蔵の天竺にわたりて故郷の扇
を見ては悲しび病にふしては漢の食
を願ひ給ひける事を聞きてさばかり
の人の無下にこそ心よわきけしきを人
の国にて見え給ひけれと人の言ひしに
弘融僧都優に情ありける三蔵かなと云
たりしこそ法師のやうにもあらず心にく
くおぼえしか

法顕　高僧傳第三ニ、梁ノ恵皎所撰法
顕傳ニ曰、釋ノ法顕姓龔平陽武陽人也
故郷　もろこしてハ支那(シナ)とさし　漢の食
支那(シナ)ハ上唐虞(タウグ)三代より下元明まで
ふりて数千年の間代々の号かはれ
どもすべて漢といひ唐といひて支那の
惣名としもちゐる也　漢ハ世代さかへし事
四百年あまり李唐ハ三百よとせよ
ともに盛なれバとりて号とし
なり　其證朝鮮人崔溥(サイフ)か漂海録にいはく

和漢といふハ倭唐といふも同じ
人乃國　神宗といふハ春日明神乃ごとく
ぜんは我か國より我國の神人(ヒトノ)より我人
のことなり
人の心もすなほなる○ハいつはりなきをいふし
もあしく中よきそのつく悪の人すて
かのこんそのまゝもそのかれし人の賢
そみてくやむハよの○しいふつてを
絶かなる人ハ立まし賢なる人とかくて
こまとうしおもむき利をえん人のあ
よもとし其人利をうけて絶なきり
てんをいそんとひとうとつそのまゝ
つねそ人れならつておきくりをそ
すまてものをこれ人ハ下愚性なる人
かれいつもつて小利を辞まへる
もとかよも悪所学の人ハしれ和人まれ
まり○こし大絶をもしるへ和人なり
悪人のまゝ○とし人ともなさハ悪人せ
驕(キ)をまのもふハ濃乃ころひ常をまもるハ
常の流(トキカウ)なるいかりてをも賢をまもるん

忠貞といふハ
忠信ハ人のまことなる也　論語十室
之邑ニ有忠信といへる孟子性ハ善也と
いへり
賢とハよくてかしこし　論語里仁篇ニ見ハ
見賢思斉焉見不賢而内自省也
賢なる人とみえて　大学人之有技媢
疾以悪之人之彦聖而違之俾不通
下愚ハ性　論語陽化篇ニ上智与下愚
不移

狂人のまゝ〇　狂人とそしるハ不狂人ともる
淮南子曰狂者東走逐者亦東走其東
走則同所以東走則異
悪人のまゝ〇　楊子法言ニ曰人之性也
善悪混脩其善則為善人脩其悪則
為悪人
驥を学ふハ　楊子法言ニ曰晞驥之馬ハ
亦驥之乗也晞顔之人亦顔之徒也
舜をまなふ　孟子滕文公上云顔淵
曰舜何人也予何人也有為者亦如是

孟子告子下ニ云曹交問曰人皆可
以為堯舜有諸孟子曰堯舜之道
孝弟而已矣子服堯之服誦堯之言
行堯之行是堯而已矣子服桀之服
誦桀之言行桀之行是桀而已矣

惟継中納言ハ風月のみちにとめる人にて一生
精を入て浮世をはなれて寺法師の為伊
儒と同じ様にして物ぬるよ文保よこ井
寺やまうし時始まにありて時始をかる
法師とまうしや寺ハあまれハ今よ

アハおもしろしとききやさかていとまれなりけり
し来る毎月たりけり

惟継　一年に伊嗣とて云ハ非し　惟継中
納言ハ平氏西洞院嫡流し
風月の道にふかし　詩歌文章のみちに
かるとハさらにおもひわたるまし
為伊儒也　伊平大納言の孫にして風雅集に
も和歌　雅儒也為伊の思ふ所の古き
をよみける
ふるき法も人の知つてめでて

ふつゝかとそ伝へて侍り

文保　花園院の年号也元年四月
廿五日山門より三井寺を焼てけり

寺法師　法師多しといへとも山として
かいふれハ比叡山也法寺多けれ
とも寺とよふハ園城なるへし園
城寺ハ則三井なるし

秀句　秀逸の詞なるゆへ秀句といふと
さりとてハ非道の戯言也

下部に酒のませけれハ心すへき事也宇
治に住けるをのこ京に具覚房とてなま
めきたる遁世の僧なりしこしうとなりけれ
ハ常に申むつひけるにある時迎に
馬を遣したりけれハはるかなるほとなり口
つきのをのこにまつ一度せさせよ
とて酒出したれハさしうけ〱よゝと
のみぬ太刀うちはきてかひ〱しけなれハ
たのもしくおほえてめしくしてゆく程に
てりかしに木幡のほとにて奈良法
師の兵士あまた具してあひたるに

男ちかひのて日吉山王にかみ
あやしきくとまうしてやいのて太刀
をもたせ給けまほ人をみるに太刀なき
矢をけるてしたる所具足唐櫃も絶をと
見てさらし男は酔をあのよはゆ
きて中にほりんといひたれとその
くわさやうてとねこれ男具足給り
あめてのち給へはおしきしたのつ物
なみなのもとなのくろき御らん給ぬ
まうしたるはよる太刀じきしくは

なのつくいかりて弟くこさうよこさま
やらしつりてよくしあらうとのしるま
それへ童人おしうておおへへうれしふ
さらとしいのてしうちかうつてこさう
まいりけるをあまりしてもおもわせら
郎やくえいり馬へ血付ぬて守
佐太郎乃家にしそしぬ入てりあさます
らてあのこともあまのこそらうてされ
も具足唐櫃へくちらすいつふすのひのみ
そうそりしめおてうれしてこそけれ

命のたえされと勝こりそんめられてゐと
まにあうよくう
下句　下苦の苦して
此まへ弄しるかり　此かのまへ弄し
やむかの　昭　いのめし新しむ義し
あるうかうりしるかり　古結の紙と見へ
奥義房の詞し
しとのまぬ　深夕うかのまことしくと
なたあうしくへ寄し海よ
泉よしうしくしくしくしくしくも

能をのさくらりしくしくと
深秘髄脳よしくへ能もしあり今古て
しては詠のむしよりへ弄し
かう心　万葉に詠みと古り深秘髄脳に
かうしのかうしへ狂乱の也
まきて　狂に字し村のまきりくと
そのかうし
かうす原　こつくれ曲にくらうすゝ
歌り　新古今よ新家乃歌し
本つく山あるかへ乃るうしくらうすの

あはれとてをこゝろへやいせん
みよのうてかり　呻吟
或者小野道風のかきし和漢朗詠集と
てならひのためとかゝれし清拙帖をかきし
ますへからしなれとも四条大納言公任
これを御物とて道風かんしに時代や多
あやうんしおかりしたりしこのかれは
公卿へたしかに世にわりしひ御物きゆり
それをいよいもとむしかり
道風　河海云本立頭小野道風忘四絶下

参議篁孫太宰大弐葛絃男
御物とあるかきよへ　右僧正の手
またてはわろしとしらぬかうへ浮唐紙
ならず
四条大納言公任　公任也康保三年生
万寿三年入道時六十一歳　道風死去ハ
公任誕生の年也
和漢朗詠集　公任の撰なり不下
せんおり肯はうてをつけてこゝにしるす
とるん日本人と唐人との詩文の羽を

撰よりて和漢と号するか詩文と和
哥を鈔出しと云か但和哥ハ公任卿
の人々書加へられ世に行るゝハ大二条関白
教通を筆者として朗詠をとりあ
つめ撰れたりとなん

奥山に猫またといふものありて人を食
らふなると人のいひけるに山ならね
どもこれらにも猫のへあかりて猫また
になりて人とる事ハあなるものをと
いふものありけるを何阿弥陀仏とかや

連歌しける法師の行願寺のほとりに
ありけるか聞て独ありかん身ハ心
すへき事にこそとおもひける比しも或
所にて夜ふくるまで連歌して只ひ
とりかへりけるに小川のはたにて音に
聞し猫またあやまたず足もとへ
ふとよりきてやかてかきつくまゝに
くびのほどをくはんとす肝心もうせて
ふせかんとするに力もなく足もたゝず小川
へころび入てたすけよや猫またよや〳〵

しゝ寒人ハ家ニしつねとしさらして
もしやよりて身をハ皆よりよろし
まろ偽なりこハいかにしく汀の中より
いそれおもしられハまゆのむかめのと
つきて扇小菊なりてうつよねさうなり
色あよいりぬ帯まりしてあをとかう
そうさ尽てもふし家へ入よろうか
なむのふらなれしも給ひつてさひ
つまうろきうとしく

猫ましく

和名猫 音苗 祢古麻 善捕鼠也 金花

猫ハ美なる猫こしもけて婦女もあそし
て煩とされ雄猫にあらされハ雄
をあらして毛を治し雌猫ハあらされ
たるハ雌をとらしめて毛を治めとしれ
本綾平浚月令廣義なとに云書り
かんかへたり

何所 なもしらすなし

行願寺 元亨釈書十四ニ云釈行圓鎮
西人寛弘二年遊帝城ニ頭ニ戴宝冠ヲ
身被革服都下呼為革上人於賀

於神祠側営行願寺安千手像以図
衣革俗呼行願寺為革堂

きさらきのはつかあまり　賭(カケモノ)

大納言は中のかしつかれし鷹丸やさ
らにいひとのなもしろて清水よゆれ逝
のまよ武射あくつくりこそ丸と清水
そつへゆれつきこそのしつへやもし夜
のうぬうてはといふそのやもしき夜
へ男のあら卿りこえとられて袖のたわ
らぬくいしけん彭女清見はいはとさ

色やまなしくはこれのみえさらん
御もし夜　安倍晴明とされ
袖のたわむせて　くしくとあら御代
赤舌日(シヤクゼツニチ)とふの陰陽道よいみくすなる
なりもしらんをといふはは行きの
いの出くいみりしめあらふつこ九日わつこ
とすゑにそしんさのめて百のあつ
しのもうりしれるいはのそうし抱へ
うすのつくいそてそりてきめしんさら
みつかし吉日まえしめてなししるのさ

ぬすみとるわざをもてつみんをみる
こころみへしその色は無常變易なさう
ひあるとみるをめて有為のおろかをほ流
なしうるきしへとぞまらずへさえんへ
乃心か定しかみる幻化したにまうま
りくをつ往をつむ理をもつさうし赤日
ふ悪戒なきまし凶忌し悪日ふ善戒あて
なふりうるん吉しといふり吉凶いふな
しろて日にまうれ

赤舌日　赤口日し　通書大全ニ曰赤

口日忌會客諍事ノ買賣ヲ　又云主口舌
宣争をおこすなりやうの日とわるきし
口こ舌とならし紛し

陰陽道　職原陰陽寮掌ニ天文曆數ノ事ヲ
昔者一家兼ヌ兩道ヲ而賀茂保憲以テ曆道ヲ
傳ニ其ノ子光榮ニ以テ天文道ヲ傳フ弟子安倍ノ
晴明ニ自此已後兩道相分

無常變易ノ境　涅槃經ニ諸行ハ無常ニシテ
生滅ノ法也　生滅ヲ滅シ已テ寂滅ヲ爲ス樂ト　天台四門
有門　空門　非有非空門　亦空門

物みな幻化なり　圓覚経ニ幻身滅スルカ故ニ幻滅ニ
亦滅ス幻滅スルカ故ニ非幻ハ不滅
何事かしばらくも住する　釈氏よ成住
壊空の流あり
昔日小霊となれに必至なり　多くの人は
なし老の斜の道しあられとして暮
ともまへ必至なりけり

或人弓いることを習ふにもろ矢をたば
さみて的に向ふ師の云初心の人二つの
矢を持つ事なかれ後の矢を頼みて
はじめの矢になほざりの心あり毎度
たゞ得失なくこの一矢に定むべしと思へ
と云ふわづかに二つの矢師の前にてひと
つをおろかにせんと思はんや懈怠の心みづ
から知らずといへども師これを知るこのいまし
め万事にわたるべし道を学する人
夕には朝あらん事を思ひ朝には夕あらん
事を思ひて重ねてねんごろに修せん
ことを期すいはんや一刹那のうちにおいて
懈怠の心ある事を知らんやなんぞ

それ一念をもつてたもちよきたる
ところなれ
されば　中庸子曰射有似乎君子失諸正鵠反求諸其身
道をまなぶ人　論語里仁篇朝聞道
夕死可矣といふ朱文公勧学文曰
今日不学而有来日といふなかれ
〽
一刹那　一弾指須六十五刹那
牛をうる者あり買人明日まゐらんと
ありてうしをうらんといふ夜のまには
死なかりんとすへり利あらん
とするへり換あうとおもふ人あらき
をさしてゆく人のうちをのいくゝ牛の
自然りそんありといふへとしますれ大
なり利ありをかへ生ありもの死乃
ちうれ牛をもつらつして牛没よきうち
人生をあるつまよ牛は死つゝされ
よろこふハ存せり一日乃命万金よりも
おもし牛のあるゝは鵞毛よりも軽し

万金をえて一銭をうしなはん人損あり
といふへからすといふにみな人あさけりて
其理ハ牛の主にかきるへからすといふ
又いはくされは人死をにくまは
生を愛すへし存命のよろこひ日々にた
のしまさらんやおろかなる人此たの
しひをわすれていたつかはしく外
のたのしひをもとめて此財をわすれて
あやうく他の財をむさほるには志
みつ事なしいけるあひた生をたのします

して死にのそみて死をおそれは此
理あるへからす人皆生をたのしまさる
は死をおそれさる故なり死をおそれさる
にはあらす死のちかき事をわするゝなり
若又生死の相にあつからす
といはゝ実の理をえたりといふへし
といふに人いよいよあさける

一日の命　大智度論曰設満世界宝
無有寿命

鵞毛かるし　司馬遷報任少卿書人固

有下死或重於太山或輕於鴻毛
死をふくむるハ　孟子告子篇生亦我
所欲死亦我所悪
生死の相にあらはれ　釈氏ハ不生不滅
と涅槃とし　生死即涅槃とも云根
本の善悪八識田中ニ下阿字一刀生
死亦断涅槃亦断といひ荘子ハ死生
大なれとも変をうけすといへ
ひ老子ハ死而不亡者ハ寿といへるを
みる生死のおよふところにあらすと見ゆ

実の理とえたる　玄義第一ニ心名不生
亦復不滅心即実相し
人いかにしられさる　老子ハ下士ハ道を
ゆてきらふといへり
常盤井の相国ハ往し頃あつふ勅書を
給ふにいかなるものにまうしておはすさ
あきらかに相国はよいかなることにしも勅を
をうけたまはりて馬にのりし若しをて
乃若いくてつ寒しはくまうつ給ふ
とのされけるにいかゝきこえれぬらう

勅書を賜人ハさまさまの書てかへせて
まうすへしかへしハ多う

寺号并相國　実氏公ハ後西
園寺流也
小面　上小面下小面とてあり上小面ハ
従四位の下北面ハ五位六位諸大夫
侍を云なり金蓮院の因幡堂の額ハ平
等寺と号し宸翰を賜ひ時ハ勅使
東よりのかるゝ内陣へ入りとゝして
勅額を納らるゝよしの寺の縁起にあり

勅言ハもろもろの人ハ車馬よりおりまゐらす
額のうらうらに緒紙つけまいらせて
法けける人ハ表うらとあり官職の人よろ
額の作しうへ勅にはしを表紙にはこうの
多流れハいりまを題せし文の額ハおも
くハたまつて題にハちくふつうとなる
ゆとしき作られ哉
題にハちかふ　ちくとハた表紙とハ右
かり昔の文額ハ表紙をもやうし一
手に付らると見えたり諸一品し落

はらんとりしかして一本に一結ひとて
むしはふることはりしいふへし
めなもみといふ草あり くちなしの花に似て
まちかひなき物の草とをみて 付つれは則い
ゆるなんとやらんしやすてさへし

めなもみ　流しこ名同 豨薟 地菘 天名精
鶴虱 是今の世俗なめりといふなり
和名集曰葈耳ニ訓シ天名精訓モ豨
薟 考ルニ本草ニ治シ蛇咬ヲ説ヲ茎葉ハ同
蒼耳ニあり さわる今俗めなもみんと云し

地菘本草ニ曰地菘ハ即天名精其ノ實ハ
也主ニ蟲蛇螫毒接傳ニ之云 又本草
蒼耳ハ葉下ニ治毒蛇井射工等ノ傷ツ
嫩葉一握研テ取リ汁ツ和シテ温酒ニ而灌ソキ之將テ
滓ヲ厚ク罨フ傷處ニ　私ニ曰ク豨薟ヲ世俗にめ
なもみといふなし　天名精　地菘　鶴
虱ハ一物にして三ことめなもみといふ也 又但
てもといふ以て草といふへし 鶴
虱ハ實にしてあまし世俗蒼耳ヲ蛇咬

よつうとゑんくうさんとくとくとく
はくらとあるなれハ此荘の流をさ立
の流にあ合し一所給いのしやまて
能令の俗とうやまとうそ　但急好
世にハ此荘をめるのりんといひさうや
真物につきてその他をはいやしそこ
すふ物のもとやしんあり勇に風ありあ家
に禄もをあり國につきて人あり小人ハ賊
あり君子ハ仁義あり信に法あり
小人に賊あり君子に仁義あり　老子曰大

道廢有仁義、莊子駢拇篇云仁義
其非人情乎彼仁人何其多憂也仁
義又奚連連如膠漆纆索而遊乎道
德之間爲哉使天下惑也虞氏招仁義
以撓天下也奚必伯夷之是而盜跖之
非乎天下盡殉也彼其所殉仁義也則俗
謂之君子其所殉貨財也則俗謂之小
人其殉一也夫適人之適而不自適其
適雖盜跖與伯夷是同爲淫僻者也余
愧乎道德是以上不敢爲仁義之操而

下不敢為淫辟之行也　同馬蹄篇毀
道徳以為仁義聖人之過也　同胠篋篇
攘棄仁義而天下之徳始玄同矣
信に信あり　深く物ねんずれば吉祥天女もほさ
しといへり　維摩経に云法猶可捨而
況非法　止観に云観法雖正着心同邪に
争ゝれ好しきもの心をしるしをもつて我
かほつきて　一言芳情とやなつけるか事
子を見侍ふ心りけるあいて我かはしき
とも
一言やせましせをわらはせまし也

ちからすはおもやせやたはしたかり
一　信無我にりん若はむかんぐ観一もおもふ也
我ましし　物絶中なふいとうもしてしれ物
ともにりよりのさしとあり
一　とん無若はなれりしうをねやうとこ
ゝのてもとつ家のやうしてあつかり
一　三扇か下らくふかう　智者は是あり
なりゆ人はもんよなり　絶かり人は無絶
一　よろう人へさし　一　仏道を得るていふは
別のまゐいとゆかしきあり

なりて世のことを心にかけ
ぬを第一の道とす此ほかもいくつかあり
し事ともおほえす

糂汰瓶　しんたハぬかみそしるかめ
つはし糂粏とも糂粏とも書なと
せり

仏道を願ふ　禅家に放下著と云ハ
万事をなけすつる事を云し

ほり川の相国ハ美男のたのしき人にて
そのことゝなく過差をこのミ給

ひけり御子基俊卿を大理になしてちやうむおこ
なはれけるにちやうやの唐櫃見くるしと
てめてたくつくりあらためらるへき
よし仰られけるにこのからひつハ上古
よりつたはりてそのはしめをしらす数百年
をへたり累代の公物古弊をもちて
規模とすたやすくあらためられかたき
よし故実の諸官等申けれハそのこ
とやみにけり

堀川の相国　基具こせ久我也一つし

已上　あつかひ終し

大理　職原曰検非違使 此ヲ云使庁ト 淳和天
皇御宇天長年中初テ置之ヲ異朝ニモ
寔此職ツ昔シ唐虞ノ代皐陶為リ士ト此ヲ云
大理ト周礼ニ立ノ官ヲ之日大司寇即此任
也後代置ク大理寺ヲ本朝又以テ刑部省
為ス紀判之官ト天長年中准シテ唐朝ニ置
使庁ヲ蓋シ是大理寺也但別當以人下為リ
宣下ノ職ト為リ衛府之人補之ニ又別當一
人 唐名太理卿 参議以上モ擇其人ヲ補ス此職ハ
之人ハ必ス帯ス諸門督ヲ世俗説ニ補ス大理
之人可シ備七徳ヲ所謂清才器量文幹
有識通習容儀富有ト云々

廳務　廳ハ検非違ノ政をとる所也廳
ハ字をまんところとよめり

廳務の唐様　所政文書なとを入て
物のまを和名よハ鞸櫃と書り

そてくはり　ちてくまりのまつ
らんとし

規模　紀矩模範し

久我相国ハ殿上にて水めしけるに主
殿司土器をまゐらせけれハまがりを
まゐらせよとてまがりしてそめしける
久我相国　雅実公也
主殿　かはらけとハよまれたるもの語
會ハられのさかさしゆきて侍る
馬上盃によれり
なり　也足素然云殿上の定器ヲ云なり
むかしハ四位五位六位殿上に日次の
云しかるし盃を殿上人こいふ綱ク差盞

にをて食せし長嘯子ハ鋺の字をまが
りとよめり日本紀にも玉鋺をまり
とよめり一書にハ玉ノ盌とかけり
将人とあるハ意富云もト部兼倶も鋺
ハまがりなりといへり
本霊異記云具ハ器皆鋺　俗云　和名集金椀日加奈万利
今案鋺ノ字未出未詳古語謂椀為磨利
宜用金椀二字也椀即盌ノ字　まりを
まがりといひしハなにかあるし　或説
貝をもって作れる飲器をまがりと云

異例色紙なくにありとはいへ今堂
上に人のかれとも年用らしき房
おしやきてまきゑかくす
或人曰大臣の宣旨乃内弁を清しあり
もろくに内記乃かりかすり宣命下をとくしれ
して堂上とせらるまにかくこさいまうりあれ失
礼なれとも並にかうまへさたにをわしれた
のよりきくるかり六位外記やとふるか
これかくさの女房以てらのてゝの宣命下
ともしやそのやうにまちらかくかりいふし

ちかくかり
位大臣乃宣云　くく宣旨とて　陪なる
ゝの西計を擁て引ゝし是西礼の義なり
内弁　是日の一人なり
宣命下　時の大内記未て出るを
堂上　皆宸殿への参らし
失礼　あらくいともしも是失礼の絶し
六位外記　十内記と云又人あり
康繼　中原ノ康綱正六位上権大外記歴ニ
德治以来五代従五位下日向守源ノ重

尚男徳治年中改姓中原

尹大納言光忠入道ついなの上卿をつとめ
められけるに洞院右大臣殿に次第を申
請られければ又五郎男を師とするより
ほかの才覚候はじとぞのたまひける
かの又五郎は老たる衛士のよく公事に
なれたる者にてぞありける近衛殿着
陣し給ひける時ひざつきをわすれて外
記をめされければ火たきて候ひけるが
まづひざつきをめさるべくや候ふらんとしのびや
かにつぶやきけるいとおかしかりけり

尹大納言云　是ハ中尹を年よつる

追儺　儺䰢何反又乃多反くりしくよ
りんくろう事文選註云昔顓頊氏有
三子亡而為疫鬼一居江水中為瘧
鬼一居若水為魍魎鬼一居人宮
室區隅中善驚小児為小鬼於是以
歳十二月命祀官時儺以索室中而
駈疫鬼焉東海度索山有神荼鬱
壘之神以禦凶鬼為民除害因刻駈

儺ジ之神ニ季冬ニ先ツ臘ニ一日大儺ス謂之逐疫ト

呂氏春秋ニ云前歳一日撃テ鼓ヲ駈ル疫病ヲ

之鬼ヲ謂ニ之ヲ除ト亦曰ニ儺

洞院右大臣　實泰公又號ス後山本ト

御事のとり清き　追儺を行ふ事也

又五郎男

清士　衛門府の被官火をともして

軾ヒザツキ　名目抄には膝突とかく小半畳

のうへにしく　和名には軾は車の前にしとて

車内にしきものをいふ[illegible]は不同

火ともしてさふらひ[illegible]

み[illegible]ものゝ[illegible]火はた[illegible]

もろへこさえてわたしたりし

大覚寺殿にて近習の人ともなそ

なそを作りてとかれける所へ医師忠

守まいりたりけるに侍従大納言公

明卿我朝の者ともみえぬ忠守かな

となそなそにせられにけるを唐瓶子と

ときてわらひあはれけれは腹たちて

退出にけり

大覚寺殿　後宇多院殿
なし　諱无字し
切箔なし　玉篇諱未聞
くすしかみ　丹家康頼十一世孫忠守
典薬頭内匠寮頭歌人正四位下
正明　修理亮信し　正親町三条庶流し
唐へわたりし平氏　忠盛此卿し　忠盛ハ清盛ノ
父し　忠守忠盛よりハあまり平氏親子
声和歌もよみなし
業家宮の人あまた小女のこゝろかける
わか此てつましくとありけるを或
人さうの後りんとして夕月夜のおもひ
つらねたりしにもののそらに秋らし
こゝろよみのありしさうしれハ下
を女のいてゝいうてうらうなや
そかれ有せさ艶てつるあらハ
うきをのつ宵殿いりて色をしんとして
ひとしもかや天板蓋かけりうら
ふかきをみてしつかさ御まりののまう
御かつてこゝろさしふ人あまいふる

てあそひもてあつかひやしらりくらい
まつの内外にハいつくもさかしかう
をふかくたてハあさましきものなれと
物ともてみやんとて幾ふしをあつ
ぬまかのいそのつゝしもかんすから
門さしてよるをまち事ハ門
のまへりもしの人ハさらしふて
此人ハこよひのやうをきいちらへかゆか
とらさかゝをしのひそれとかる
それハかのゆかりてこのかのすゝ

こゝやたちも隔て来りて心をまち
なされぬあしつゝゆくをえつきてさ
めやうのゆゑかうふこゝろのはえも
さいわやうのあてもちしきれハめて
おりしゆかりしてきりていそく入
大臣の御すゝしきあつかひもうしやゝ
まつよもしまうてまれてとゆきたこ
とまうしいのていてまうこともつて庭
をゆかしくあゆまゝうつそつ卯月ハ
かりの隠えんふあらしうしとおもり

あて桂の木のおひたるかはかしこくよ
またいましたてまつりてしく
そのかみ事ありけれて　ためしなし
なり
かへるさの月のまつりとて　此ある人は
此人もやこれはのかたさとは此説は
始終云しるす此意好り自説もかや
ところせけれは　不せさけれは
儀のしとあるぬきには　つまりしたに
しめさるへし

けしきさしてよ　女房ともれ下部みいは
つき朝し
あかりかつ　あとうつろひまとひんと
云し
このちやまとれいとゆへりめつ　こよ
のいさつろやまもしのへさしと云てけ
糺ものゝかくし
桂の木のたえさりけり　今そのところ
へとをうつるなそのされはまとへの
出てうつ此木のゝうつしまてかんとつるさ

かくてなかし菅家の御うたよ
君かもとむ御ところのこすゑをゆかしと
くみまゐらせしかへりしを や
心の底のうきにたえかねていつこ宮のさ
こころなきみさへよをいふ車のおと
ものを雲いくらくもかくれてあまる月の
月の光もれとをくまてへあかるかみ
人とみえしかなの御室の御局にたえしられ
わかれさへもかなの男女ともにそみちるか
まてぬかるらすきぬしく御なるかわたん

はなはしられつつなくなくいにしよ
しとみえてえをいとひはらはらと
かりそめにそめしかれ世のしら露の
ときはしのふへくもなき扉
乃やふきしくも面影はあらね 月は
ゆかれしとそ本院をしのひてかへりし兄
ゆかなる夜
すまゐはあはれ わかれの朝の夜と
人なる夜
なきよるつゆをきて 天神はらへ下み

かの蕭慶ともうちつれてへいの
家をし家夕かけしなきしみえ
ぬれんとそ
清たきゆしくれ　朝をつきまさ
とはり
かつくら　女かしらつきしたるか
ころ乃歳
高野の澄定と人京への下りくたり
わそ道して馬よ来ゆ女の心たれの
ころ乃かゝ玉川のほとり男あしく見て

見し男の馬をかりへおろしてその男は
さ脱あしくとかめてこへ帝をいたら
やれたる四郎か甲子いまれ此女とかを
此尼はおもふのくふしうへそくを
おもひそそしうくいをおもれ
見えのしもれ優婆夷もくの男して此
女を据りし老父さもの来賓をれあく
うおつといとれたれは玉川の男いた
作ららやらんえしうけもし給ていふ
よと人柱のおほさて行とのふく悲路

他学の男とあうくにいたりてさうら
里人ひ教えしつゝかの物弟子為
して馬川なりしてみをさられぬものたり
とうりいきりひをり

澄空上人　傳記未考之

坂籍　籍ハ踏し坂の地とふミちらしう
こゝかくされかりしさ給し　漢書治は
みえたり

四部或弟子
優婆夷　翻譯名義集第一比丘名
法華経比丘比丘尼優婆塞

乞士清浄活命故以云名含三義一
破悪二怖魔三乞士又翻云除饉比
丘尼通称女為尼尼得二量律依故
應次比丘又称阿姨優婆塞名信士男
優婆夷名信士女又云清浄士清浄
女雖在家持五戒男女不同為故云
善宿男女西域記鄔波索迦唐言近
事男舊曰伊蒲塞又曰優婆塞皆訛
也鄔波斯迦唐言近事女舊優婆斯
又曰優婆夷皆訛也言近事者親近

業事諸佛法故也又曰百歳比丘尼見初受戒比丘當起迎逆礼拝問訊請令坐比丘尼不得罵謗比丘比丘ニハ得說尼過

いましめて　深きのぞみは
ありのまゝにいはん海よりふかしは眼
うけしいのちをうけ給へれ
そうあん　敬云と書してもつて
悪口すべし

女の物いひはちをしらせすさうあへきまれ

おしなへて男はつよくこそあれ物ことに怠
し院の御時まきのうち女房ところはなれ
男をこらへあふしもあはしに新はやらし
またしゆしのみえられたりけりふりの
大納言とのやはりすゑのみ男はえさてはへ
さはや菩提をもとめんもあり門の内大臣家へ
男女してきこえてはのしるしんと仰られ
こうたる我は新教すなはち男をも
つきすこ定めおもはれけれどもてものこと
は女しうてそれのやうしおもてに内室し

とそ浄土寺の前関白殿ハおさなく
て安喜門院のよくをしへまいらせさせ
給ひける故に御詞なとのよきそと人の
仰せられけるとかや山階左大臣殿ハ
あやしの下女のみたてまつるもいとはつかし
く心つかひせらるゝとこそ仰られけれ
女のなき世なりせハ衣紋も冠もいかにも
あれひきつくろふ人も侍らしかく人に
はちらるゝ女いかはかりいみしきものそと
思ふに女の性ハみなひかめり人我の相

ふかく貪欲はなはたしく物の理をしら
すたゝ迷ひのかたに心もはやくうつり
詞もたくみにくるしからぬ事をも問
ふ時ハいはす用意あるかとみれハ又
あさましき事まてとはすかたりにいひ
出たす深くたはかりかされる事ハ
男の智恵にもまさりたるかと思へハ
その事跡よりあらはるゝをしらすす
なほならすしてつたなきものハ女なり
その心にしたかひてよくおもはれん事ハ

しゆきハあれつハ女のまつりことを
し候女はうれそれをおうしくとさ
まうらうんそてぬよのをおうしく
してうまにおそうらへられやさしくを
ねしろてをおおゆへ見ことし

あれさう女房　されさう女し
あう川の内大臣　具守公ノ号ス芝釜円太下ト
浄土寺ノ前関白　九条文師教公号ス已心院ト
又号ス浄土寺ト元応二年六月七日ニ薨ス
四十四歳

安嘉門院　堀川院女御浄土寺太政
入道云房公ノ女ムスメ也
此者ハ太合　実雄ハ実氏公ノ子西園寺
あるは一家洞院実雄號ス山階左大臣
くへよそらうく女
さらう一称して女のひらめうゐせと云

人我ノ相

蔵乗法数云般若四相

我相	執取自体
人相	数取餘趣
衆生相	権々変異相續
寿者相	一報命根不断

寸陰おしむ人すくなしこれよくしれるか
おろかなるかおろかにしておこたる人のため
にいはゞ一銭かろしといへどもこれをかさぬ
れはまづしき人をとめる人となすさ
れハ商人の一銭をおしむ心せつなり剎那
おぼえずといへどもこれをはこびてやま
ざれハ命を終る期たちまちにいたるされ
ハ道人ハとほく日月をおしむべからす
たゞ今の一念むなしく過る事をおし
むべしもし人来りて我命あすハ必

うしなふべしと告しらせたらんにけふの
くるゝ間何事をかたのみ何事をかい
となまんわれらがいけるけふの日なん
ぞそ時節にことならん一日のうちに
飲食便利睡眠言語行歩やむことを
えずして多くの時をうしなふそのあ
まりの暇いくばくならぬうちに無益
の事をなしむやくの事をいひむや
くの事を思惟して時をうつすのみな
らず日を消し月をわたりて一生を

いろひいろうつり謝霊運は清花の
筆文なりけれとも心つよく風雲の思
を觀しけれは恵遠白蓮の社へもいらせ
ゆるさゞりけれとも光陰の時は花
人よりも光陰をおしむのこゝろあまりなし
むかしは周公思亀をとりて世をまもる
くして此人は今の修せん人は修せよ
とそなり

寸陰おしむ

淮南子ニ曰聖人ハ不貴ニ尺之璧ヲ而重ス寸之陰ヲ時ハ難ク得而易シ失也

晋ノ陶侃カ曰禹ハ惜寸陰ヲ人ハ可惜分陰ヲ
これらもまつり　理を知て光陰を
おしまれけるとし
秘事ハいそく茶ふの日　屠所ノ羊ノ
あゆみに似たり無常乃身なれハ
一生をかろハ枉て適一生蟻施磨し
とよふなり

謝霊運　小字客児襲父爵ヲ封康楽公ニ
世ニ称ス謝康楽ト幼頴悟ナリ文章之美与顔
延之為江左第一世ニ称ス顔謝ト

法花八筆変

正法花 添品法花 芬陀梨
法花妙法花なといひて又支ハ翻譯
あまたありし其中ニ名ハあまねく了蒼色其
中法花の執筆あまりといへとも了蒼
ハ筆好しり後の世の人ならしへこれも
ならひうあまし今の世に行はるゝハ晋代
羅什の翻譯にて三乗子僧睿ら筆
受し天竺の梵語を唐土にてあらはす
を翻譯といふそれを唐字よりあらはす
ものを筆受といふ涅槃經ハ其中ら筆

文也

恵遠白蓮を植しより　廬山の恵遠法師
や晋乃代の人にて　佛祖統紀六七廬山
ハ遠公往生浄土ハ業を修することあり
九品蓮ハ巻ハ社友といふ四と以て蓮
社といふし　高僧傳曰慧遠居廬
山與劉遺民等結白蓮社浄土宗の
了巻ヶ盡牒ハ第九ニ恵遠を法師ならと
めつめ四十八日念佛を行ひ謝明其
中ニ表なさまさいうんともうを謝明

をハゆるし霊運をハゆるさゞりしをあ
やしみて淵明ハ酒をたしミえうるは
放逸也霊運ハ有智精進の人なり何
ぞそれをゆるさゞるとなれハ
慧遠頌を作ていはく霊運不心雑
起故淵明競心専一故といへり霊
運ハ法花執筆の者にて雑起心ありて
餘行を修すとこゝろ得
風雲の句は　風雲の気をあらはし
ありといふしかるに謝霊運ハ法芭よ

徧歴していくら不しく詩作り風雲
気をあらはしたる心雑乱なりとて
浄社へ入んとせしを遠公ゆるさゞりし
もらしてこれをなせる時ハ　霊運の句さ
時ハ　死人の用しとし
此人ハ止修せん人ハ修せよとなり此ハ止
観修ハ修行し是観作の二し
高名の木のぼりといひしをのこ人をを
きてゝ高き木にのぼせて梢をきら
せしにいとあやふく見えしほどハいふこと

いにしへもちてあそひしわさをは
つゝまてあやまちする事にてあり
ましめをもしとりいふよりそへ
とれけれとも此しかとにゝくいふ
さしや此しはなのふに目くみなる枝
あやとりて此きのおそしものいは
さすあやまちへやもとすところにてありて
此事としにはとりあへ天下らる
もとも聖人のいましめにあつて鞠を
こゝろをけしのらやもとるもの

まつりごとのやらん
人をさすて　捻此字し清書を教へると云
聖人此いましめたまへり　易繋辞曰
君子安而不忘危存而不忘亡治而
不忘乱是以身安而國家可保
鞠をもて不をけおとして
類聚名義抄（類書）鞠字六
切說文蹋鞠也徐按蹋鞠以革為圓囊
實以毛蹵蹋為戲亦曰蹋鞠古今
注黄帝習兵之勢劉向別録蹴鞠
黄帝造以練武士或云起戰國漢霍

去病傳穿域蹋注服虔曰穿地作鞠室也

双六はもろこしの人あそびものゝ名

しられおはしますへしとさいへり

へまいりきたれまとものけるへまと

あんしてこちをはかりしてみをすり

ことそまへまあはくへしとぞ云

道のしまるところへあそびのたよ

さんなきを又あそびなり

双六　説文博局戯六箸十二棊古者烏

曹作博尹文子曰博畫関塞之宣得周

通之路聲譜云博陸采名也陳思王

製双陸局置骰子二至唐末有葉子

之戯未知誰置遊加骰子至于六骰合作投

投擲之義今作骰非

圍碁雙六好てあそびし人ハ雲又逢

小さきものをうつ悪きこともしわろき

ろはしてみてよそもちていみじく

おほしけり

囲棊　博物志堯造圍棊以教子丹朱

或云舜以子商均愚故作圍棊以教

之其法非智不能也　論語陽貨篇　飽
食終日無所用心難矣　不有博奕者乎
為之猶賢乎已　孟子　博奕好飲酒不顧
父母之養二不孝し

四重五逆　四重ハ五戒の内飲酒を除て殺盗
婬妄をいふ律に波羅夷罪と云處なき
断頭罪と云し人の頸をきれは再の
生せさるかことし　此四重罪を犯とハ懺
悔しても滅せさるへし　五逆罪ハ殺父殺
母殺阿羅漢破和合僧出佛身血

ゆるハ遠國へおもむく下ところの人は心
ちらになきてんならさとハ人のひを
てんや誠のちるをいとふの切なるを
くまとあつ人ハ從のことにいまとも人
の慈悲をもとさはさことをもてすをや
とらしむる人をもすつ中陰年をやく
さけ病にをまつけれいなんやせをと
のられもらん人又さらに栓すうる不
人間の義式いけとのことりさうりくる
ぬ世俗のをもくれとり勝てさとなる

らんものは行かうのをもとむるがごとく
心のいとまもなく一生は雑事の小節に
さへられてむなしく暮なん日暮塗遠し
吾生既に蹉跎たり諸縁を放下すべき
時なりし信をもまもらじ礼義をもおもはじ
この心をもえざらん人は物くるひともいへ
うつつなし情なしとも思へそしるとも
くるしまじほむともきゝいれじ

日くれみちとをし　史記伍子胥掘楚
平王墓出其尸鞭之三百曰吾日暮塗
遠吾故倒行而逆施之　註子胥言心
在復讐常恐且死不遂本心今幸而
報豈論尚道理乎譬如人行前途尚
遠而日勢已暮故其在顛倒疾行逆
理施事何得責吾須道理乎　史記主父
偃曰吾日暮途遠故倒行暴施之

蹉跎　韓文烏乎吾意其蹉跎註言不遂
其意顛會蹉跎失時也一曰跌也異本
に蹉踹とかけり

信をもまもらじ礼儀をもおもはじ

莊子盜跖篇比干剖心子胥抉眼忠之
禍也直躬證父尾生溺死信之患也鮑
子立乾勝子不自理廉之害也孔子不
見母匡子不見父義之失也此上世之
所傳下世之所語以爲士者正其言
必其行故服其殃離其患也

そしるともいふへし

莊子逍遙遊擧世
而誉之而不加勸擧世而非之而不加沮
定乎内外之分辨乎榮辱之境斯已矣

罪ふかきあまりの人の色めかしくゝ

そのうちこのてあらんへいふさせんとて
かくちかく男女のまへのよ色をこのむ
よそなるしもをこなふへし又まち大
ことにてんへるし老人のさかれ
人りものもりて具あらんと思ひかへる
をかしきにありて世のありさまなんと
色さてたちたる事りいかならんもの
ものは酒家このや家へ入り饗應せんとて
らけれたる

饗應　あるじまうけ　八雲に食物

まうちきしうをとハあかしと云

今出川のおほいとの嵯峨へおはしけるに
ありす川のわたりに水のなかれたる所
にて賽王丸御牛を追たりけれはあかき
の水前板まてさゝとかゝりけるを為則
御車のしりにて希有の童かな
かゝる所にて御牛をはおふものかと
いひたりけれは大殿御気色あしくなりて
おのれ車やらんことさい王丸にまさりてえ
しらし希有の男なりとて御車に頭

をうちあてられにけりこの高名のさい
王丸ハ太秦殿の男料の御牛飼そかし
このうまさ殿に侍りける女房の名
も一人ハひさゝち一人ハことつち一人ハはふ
はら一人ハおとうしとつけられけり

今出川のおほい殿　菊亭兼季公也　西
園寺太政大臣実兼公二男也

有栖川　或抄云有巣川　本流也

り
ちやうかうりきよやのあたりも川
わたりにてはなと有しへ矣

京極前太政大臣 右二条太皇太后宮 聖義かは
つましやかなる時中院にて松殿映氷と
いふ四とさかんなるとかんえいらく
り君のうねみそらいおはしてあるとり
いむそくるとともなうつはうる 西行法師
右女院おはしまして中院の前をとる
ならおはりてかはりしまかならぬ女房
かや待ちはべりしなるとかん 一葉抄に
待賢門院の女房の郎宮は後嫁なあるを
川りあり聖義の女院の郎宮は染

野まかり
わかれのかな 呂がさかのぼし
右大臣 信清ふし号堀川文号に右大臣
内府関白道隆ふれ隆し
料の御年釣 天子の御年ならぬし
女房の名をも 三条家末洋
堀河殿といふ所にておはしおはしまかり
まうでし所の念仏ともおほえなむ
入らるかにしのさし中にいふぞ
増とかかやかなるもるをそるかに名れ

ハ其中よりいろはをしつゝぬいくの給ハ
しそところハ梵字也是て
を聞きの師なにもしや人東国にて
いろはしやはつふあろされなりと
うを給ひしうハ其人りあのまつて
らかんやさりやとちのてるゝよし
とりよいろをゆしゝも為あり
くりも給ふ義ちりてゝ西
しそてまつハ道場とせうし給ひて
前の川原へまいりあかんわるうしこま

其さしらいろとそとかんつきまゝる
わするのまゝはのよこつゝハ仏のみさな
さけよ給ふ人しさいの給さめて二人給家
へおあのて山りしうゝみはしつれ
あのてともに在よ多りまわいりとひよ
そのむしへおゝまわいやうみれ世に
申らんしからん字のん字なしいの名名
をも始まりなりとやせ此をてにあよ
似て秘訣也仏も此徳な似て
開導とらしまてもさいろむさんのわり

乃ぬるれとも花をとろくしてかゝとすら
ぬきうゝくのいさゝれしくあそえてん
此くろりしまゝしみうれつけ给ふし
菁莪家　梅津国小あり
おろし　菩薩とくとえんとし梵論(ホロ)
と書へ并し東国よハニうを僧といふ
とろうおろしかの乃ゝしといふ物一
其ゆりそのこころよくおはつり
青院の鉦(カリ)さゝれまうゆの物りを名と
はくろけむしの人はもとしを求を

多くあり此よしにやもそく往其ゆうそう
はは へぬくく梁しも尭とあしはさんと
しそうやうみ也のりいてもろうし人の
名ともあすき丈字を尼んにもろ益
なるにまうかりゆすしかむし天まとも
とか呈院とこのむハ德井の人のかわ
らはあうましし　とろう
故しもろへしうれ若もあり一よハ高
くたんしてあきん二ハうまれ人こたハ
病うへ多くつまれ人四よハ酒をこのむん

友にハよくいさめつれハ為になりて
言葉よき人七りんにしつかなる人ハよき友三
あり一ツにハ物くるゝ友二ツにハくすし三ツニハ
しは智恵ある友

論語ニ益者三友損者三友とわかつよも
とつきよく多く御んしきうれ人ハよき交て
必へつらふハまわりあれ人ハ多く損さ
りんものなし漢数前ノ十年豪英の
ましくらハ同参代哉よしらそとい
つかう情ある人ハ言異とおそれをえ

飲食ともおなしのまゝにもちかし絶とこ
ろふかきわり酒をこのむ人ハのかれぬ
ましとおそれてしくよくいさめつ共な
一筋乃いひけみちとそれて父母の恩を
わすれけり唐土ちかき人ハ百代乃名
へしれ残のかれ人ハ久しくなかるゝ
まれしもちかれはやもいい

雞のつちのたのゝ日ハ鴟ぞ春とと
あんふくハふとつうへ物ちれハ猫ちりうを地
よく雞そらいしくの前にしてこそうろ物

なれハ御んてきたれ奠なれ集にハ雑さう
なにもなり雑松茸なとハ御湯殿の
うへよりまいらるゝをくるしからぬそのおりハ
めされまいらり中宮の御湯殿乃人ゑ
ふたて棚よ為乃あふゝを小山入道殿
ゆらんしてめしをゆてやうてゆよ
てうやうの物さるゝそのもとうて
ゆなるよせてゐしゝかるゝれゆま
わきまゐるもかゝ家人のゆつ
よろ～しゆゝかるゝふれ参りたり

雛乃義ふらゐまゐ日ハもんそそれ奠と
腠よ称つを鷄と云ふ瑣碎縁よ雛奠
腠を墨よ塗りぬよさせハ青黒小
て愛らしへしとあり

雉

儀礼相見之贄各執雉大夫執鴈注
雉取其守介不失節鴈取其候時
而行也昏礼納采用鴈

松茸　本草綱目小菌(キン)蕈(ジン)ハ執松下香
蕈とあるハ松茸の新ぬへしくるしさ
もしを耳といふ日本草の字(ジョウ)を書る

なれハ御んてうすれ奥すれ鳥にハ雉さう
すにぬ物なり雉松茸なとハ御湯殿の
うへよりかへさるゝをうけたまハりそのおりハ
御これあり中宮の御湯殿のうへ人
えらみ棚に為乃尺ゑらひて小山入道殿
ゆるしして御せんに御けてやうて御よ
てうやうの物さうらひそのもてなしにて
御たるよおてゆへしんあるへきれ御ま
わうこまいらせ候もかくしてあひ人の御たつ
まいらせあへしくものとまいれ候へく

雉乃義ハあるすて日ハきしんえつせん奥と
睽よ行ハと鷄といふ頭碑縁よ雉奥
睽を黒よ鷹しゆよさきハ青黒小し
て愛をいへしとあり

雉

儀礼相見之贄各執雉士丈執鴈注
雉取其守介不失節鴈取其候時
而行也昏礼納采用鴈

松茸

本草綱目小菌蕈乃軌松り香
蕈とわりハ松茸の類なるへしといふきこ
といふを茸といふハ日本茸の字を書る

平氏字をあやまれるなるべし
貞和集有松華頌華字書ける康
華氏華の字義を以て定めて松
華なりて云ん

中宮　後深草院の中宮也
北山入道殿　西園寺の実氏公と云し意益
井お西と号をば則中宮の文し　為ハ
雑しるまされる歌よ東ハ為をとる
てえしぬみえ古ハ雑をとりて私を
なまし俗を其時よ雑を用ひ為をとる

らんと見日本の歌のなるべし
鎌倉の海よりかといへ巢ハ乃さなひ
りんハ乃るうれ抛してすゞ[illegible]
ありけれを乃鎌倉乃年寄の[illegible]
いさ恵をのまうまうまし世まてハと
かくし歌人乃歌人ありてし作うさう
歌ハ下能もくもてこさうて雑[illegible]
し抛そうともその物も世[illegible]
みかれハと乃しまてもへ[illegible]
よう作れ

鰹と云字本草綱目續書等よりゐる
らん海邑心鏡に鰹音堅大銅とし
あり万葉集卷九に水江之浦島兒
之堅魚釣鯛釣矜及七日とのる文
武部大輔石上堅魚朝臣といへるの
名も同卷八よの事ぞ倭名集にも
鰹魚 加豆乎 とあるこれは鰹と堅
魚とも云し鰹とは首しるそれく
まうれ魚し

唐乃物は葉代にはなるとしもとよし

書きしは此國におもくかゝれは
なれとものてんとなしてものや
ならぬ乃に無用の物とそれぞう
はしてあさましてくるしきを
ろうしき残乃物を多くとせんとし
又乃くたくたくしきれを
とくるを作らむや

唐乃物は葉代に　あるかしやうく乾
日本ならぬ物し
まれ物を多くとせん　尚書旅獒篇に

不宝遠物則遠人格　老子経曰不
貴難得之貨使民不為盗

御かなひたる物ハ馬牛はうれなら
しもかしこくいてきつれとうくてふ
ゆゑ物すれハいてハせんむいまなり
あやしきつとめ人ハりもまのさうたまと
皆事へし作まこさ衆しにあつ物すまハ
しらまくしりさめかつまてとわうすんを
かの鳥々くとのをへて用すれ物し
なかしけくく物ハあゆるにあくきうを

作まことふゑハつまくとこさう籠に入
りまして雲とこひ野山とおりふきへ
やむことなすしも思のよりはあやしそ
思ひくくハあかれん人ハ道と衆のしまん
やまひしかして聞とまうこりしも
ハ桀紂か心やし王子猷か色ひとをせし林
よ衆のしめとかんくせうよの友とし
來とらへたるしめくるよあるに兄弟
らし來禽あやしき獣国よやしるハ
まことうくゑふるに作りなれ

畜るゐ

周礼六畜注獸可畜者六獸牛馬羊犬豕雞養之曰獸用之曰牲又云在野曰獸在家曰畜ゝ与獸同 許救反 荘子秋水篇何謂天何謂人曰牛馬四足是謂天落馬首穿牛鼻是謂人郭象注云人可不服牛乗馬服牛乗馬可不穿絡之乎牛馬不辞穿絡者天命之固當也苟當乎天命則雖寄之人事而本在乎天也

逸口義云牛馬四足得於天自然者不絡不穿将無所用此使是人心一臆事

犬ハ鶏とりのるゐ

金楼子陥犬ハ守夜之警雞ハ司晨之益 東坡云畜猫以捕鼠不可以無鼠而畜不捕之猫畜犬以防姦不可以無姦而畜不吠之犬

家ゝに

孟子雞鳴狗吠相聞而達四境 老子云鄰國相望雞犬之音相聞

もろ獣ハ　莊子天地篇困可以為得
乎則鳩鴞之在於籠亦可以為得
矣在纆繳之中而自以為得則是
罪人交臂歷指而虎豹在於囊檻
亦可以為得矣　司馬遷報任少卿書
曰猛虎在深山百獸震恐及其在檻
穽之中搖尾而求食　東坡詩ニ云
烏囚不忘飛馬繫常念馳
生をくるしめて　夏桀ハ無道にして
百姓をやふり妹喜を愛して瑤臺

を作り牛飲するもの三千人なり関
竜逢を殺す又殷ノ紂妲己を寵して
婦人乃云ことにしたかひ鹿臺鉅橋
をたてゝ天下の財をあつめ狗馬
奇物を宮室にみてゝ酒池肉林
をつくり長夜の飲をなす熨斗
炮烙の刑をおこなひて人民をやき
ころし朝渉の脛をきり賢人の心を
さきはらめる女のはらをさきて見る
みな生物をくるしめて国をうしなへり

ひろし果して桀紂国家をうしなひぬるとかやいへり

王子猷が鳥　章孝標ガ詩ニ阮籍嘯場ニ人歩月子猷看処鳥棲ム烟ニ此句朗詠にあり王徽之字子猷義之が子也風流の人也晋に仕へ黄門侍郎ト常竹を愛してかへてなけて此君と云此字の心へをの竹間の名つゝよ鳥のなかつゝ遊棲すとこそ聞え侍し

尚書旅獒篇ニ珍禽奇獣不育于國ニ
めつらしき鳥

人の心ハ文あらはれたる物のとしるとをしるとある書ハ別にこそおもはむすらかなしとも見とかや学問の修めんとおもしはからは医術とたしかにもとやすめへをなるもとを人のいはん以ともをわれは医の書にしたかへとは何とも討馬家の六藝は出かけのぬ見とかぬへし文武醫乃

道徳によりてハ人へかしれ己を学りん
さはいてうかう人へとらへかしれ次よ合
いんの天しよしめらぬのを調ちわらん
大なり通しまへし活よ細工よゟけり
番ありしかれのししを多能ハ君子
いさつ下して讃美しきしに気作よ
助なりハ忠孝乃道森足を村らく
すらいへとも今の世りハ足をもりそ
世をおさむろ本願やくかゝりそ
りわくり舎ハ乏しれなきとてらつる

乃益ありきみまんりさらりし
人たる能ハ文おさめらに　六経四書をよ
みあきらめて聖賢乃道を知りと
第一とれ其道ハ孝悌忠信文學
朋友たらにくわりてを教を仁義
孝弟を能よまもらん
醫術をおふ　晋張華梁陶貞白唐孫
思邈の類全く醫者よハあらん学問乃
となりて醫を学べ者て
忠孝のつとめと醫にあられハ　小学曰

伊川先生曰病臥於牀委之庸醫
比之不慈不孝事親者亦不可不知
醫

弓射馬に乗ること　周礼注に礼楽射御書
數謂之六藝

食は人の天なり　帝範務農篇に夫食為
人天農為政本倉廩實則知禮節
衣食乏則忘廉恥史記酈食其傳云
王者以民為天而民人以食為天

多能は君子の恥なり　論語子罕篇に
大宰問於子貢曰夫子聖者与何其
多能也子貢曰固天縱之將聖又
多能也子聞之曰大宰知我乎吾少
也賤故多能鄙事君子多乎
哉不多也

諸芸に巧に余所なる妙なるハ　大選十六
思舊賦序に嵆康博綜技藝於絲竹
特妙

歯音の道　八雲抄に和哥に歯音ぬけあり
文字くとをして可読やうにと思

なき人とものゝますが人としいて不了國
乃こえぬ嘉れぬれにやむしてを結を
しておもへ人其の抔りしてをわまり
人いとぬいふことははるか人しの
身に應じて成えをしいとはるむ
而中方一ヶり食物第二にさし衣物第三
に居所とし人の乃みなす此ことハ飢
をこ寒さしは風雨よりてをを傷まもしてし
はうにもくはとものしのしは從人皆
病ありて病しをう傷まつれハそのさは人

君のとして驚様なりとはる人てしは葉を
もとて雪乃しゝ来えそう成まうつしは
此雪うけさるををめりしは此雪の外
とりしもいるしををかうしもを雪乃
まる倹約のしは維の人ゝそしすもん

第一食物　鷲座新書ニ云居服食ニ三等

湯東谷論次テ曰學者居テ中等屋ニ衣ハ下等ノ衣食ハ上等ノ食飼者茅茨土階ニ非今ノ而宜ク瓦屋八九間僅ニ蔵ム圖書ヲ足レリ矣故ニ曰中等屋衣ハ不必綾羅錦繡

也夏葛冬布恁適寒暑足矣故曰
下等食至於飲食則當遠求名勝
之物山珍海錯名茶法酒物備庶
不為流俗士故曰上等食

年よりみな病あり　一切の人をしてふ
くもつわすれハ疾病なくしてよハさう
ものなり故に孔子も飲食の
ことのものを慎しめり
此四つをさうと　食と衣と居所と
薬しと合て四しれ杜甫詩分類

七多病所須唯藥物微軀此外更何求

是清法師ハ浄土宗よろしきといへとも
学道をたてもそて明誉念仏して
やまひかちに世をわたりて経しわつき
かし

是清法師　新千載集第十八雑歌下
是清法師
のまてて日しられ世とやうゑを
いとつみりしたり方紙くてもの

又新後拾遺集十八秋哥に

[illegible]山おろし吹て[illegible]

さそふ川よこきる月かけ

人におくれて四十九日の仏事に或聖を
請し侍りしに説法いみしくしてみな人涙
をなかしけり導師かへりて後聴聞の
人ともいつよりもことに今日はたふとく
おほえ侍りつると感しあへりし返事
に或者のいはくなにとも候へあれほと
唐の狗に似候ひなんうへはといひたりしに

哀もさめてをかしかりけりさる導師
のほめやうやはあるへき又人に酒すゝむ
るとておのれ先たへて人にしひ奉
らんとするは剱にて人をきらんとする
に似たる事なり二方にはつきたるものなれは
もたくる時まつわか頭をきるゆゑに人
をはえきらぬなりおのれまつゑひてふし
なは人はよもめさしと申き剱にてこゝ
ろみたりけるにやいとをかしか
りけれ

雖もとし明らかなし愚人の多さへと
とりまつくるにをいふら
たとへの負ことへまりてゆうすくら
いまんどせんふわめてへくりへうくら
ぬつきてろへ来ぬれのいてまふし
さるへしそのきれとさるいとしたらく
ちといふしとある老子来
雖万ゆよりうへ来し陰極而陽生
のふし天地万物之道よ剋し
改て益なきはあらためぬをよしと

もろし
論語先進篇ニ魯人為(ツクル)長府閔子騫(カ)曰(ヨル)仍
旧貫ニ如之何(イカン)何(ツ)必(モ)改作(ン)
雅房(ニサフサ)大納言ハオありてよき人にて大
将ふもなさんとおもしくむありしかは院
のもおなる人さいとあさましく来
まとかんゆりつきさんけとはうよりの
くしとさ比ゆれろよまさきつきぬに
愛たいりんとくいゆそうなの足を
こりゆつゝと中殖乃完しろうとゆろ

とはされ候まじく候かくてかく
しかして日本の中氣色をたゞし罪
進をさゝゐはさりくさもりさ
人多くられ候くはんともる
まやむかしへ後すゝめし唐土へ
不殺生もとしかしよしとさくも候
てまそのゝ喜乃中ゐはいて
多くさゝのゝ大くしいかる地と
うつしそめたかりしかてわその多
のしまん人へはちくしやくさんがいのさく

のし第の五戒ちいされ候ますてもし
ところて三つ悪をさへて子とものの
殺生とすつし夫婦と夜すの偸盗
ぬいり殺生ちかし盗もし命とお
しめつまむしへ悪邪淫のかし心すん
しらをまさりて妄しかまにくる
みゆわさへ命終ちへらんすのいかてさい
多ましいさらんをへて一切の善場
とかくく慈悲の心をもんさく倫り
あしく

雅房大納言　正二位村上源氏號ニ後
土御門内大臣定実公男
院　此院ハ院御所之説ありしかれは後深
草亀山後宇多し　但後深草亀山
両時の事也
近習　礼記月令ニ禁ス近習ツ注ニ天子所幸ナル
者習ハ若狎シ　近くなれてうしと云
いかりのものあらし　残害ハ殺生を謂
めて殺生をこのめる
ちく生残害　さんかいハそこなふやふるし

多欲生恵此多のよくのふかきを
ちくしやうさんかいと云
顔回ハ志人ニ労をほとこさしとあり
まへてくへとらうしめ物ともてくろう
まいやしき民のうへをそこなふ
色々しれ父いつくしきにもとをしあ
こゝろひそうつくしめゝし無きものあ
つましとめしき人へのわたゝのへと
みちあわれる人とかるゝにうかろしれ
あやしみて動きなふろくしくろうしくしわき

ます鏡の面しにゆするへし是をな
照して無けれは慈悲乃心におも
ひあはし老人のかうへのいろのかは
なしの面に白髪の面をみる事をえんと
も又それか容色おもり老せさるを
男を思つらしきをいとはしく
いへ給そこくるすの程なるにくし病
そこつまをむかしへ思ふらしこれ
つこさ病へももす菜をのせて
わかとりしつよへ老すすれとわ

き一旦わかおもかけりへ世わしをか
くはへおのしつさたりこいふまを和
也し凌雲の顔と書て白髪乃人とな
しきめしくのさにあしれ

顔回　論語云冶長篇子曰盍各言爾
志顔淵曰願無伐善無施労朱子
注云伐誇也善謂有能施亦張
大意労謂有功或曰労事也労
事非己所欲故不欲施之於人
物をさへさるとき　さへさるはせしらし

精一集渙然流離絡朝未餐則囂
怨思食而曹子銜哀七日不餧く
凌雲乃額と書て　世説新語補十六ニ
云凌雲臺楼観精巧先稱平衆木
輕重然後造構乃無錙銖相負揭臺
雖高峻常隨風搖動而終無傾倒
之理魏明帝登臺懼其勢危別以
大材扶持之楼即頽壞論者謂輕重
力偏故也　洛陽宮殿簿曰陵雲臺上
壁方十三丈高九尺楼方四丈高五丈

棟去地十三丈五尺七寸五分也　韋
仲將能書魏明帝起殿欲安榜使仲
將登梯題之既下頭鬢皓然因敕兒
孫勿復学書文章敍録曰韋誕字ハ
仲將京兆杜陵人太僕端子有文学善
屬辭以光禄大夫卒衛恒四体書勢ニ
曰誕善楷書魏宮觀多ハ誕所題明帝
立陵霄觀誤先釘榜乃篭盛誕轆轤
長絚引上使就題之去地二十五丈誕
甚危懼乃戒子孫絶此楷法著之家

今ニ魏書二十一ニ有。韋誕傳

物みなあらそひかれはをのれとものをもて人に
まくる也我身をほめて人をそしる
りもろよへしられはまことの道にを勝
負ることの心人は勝て無あらん篇すら
をみまちの藝のまさりたるをもて誇
ぬはまことにおしむへきわか心人乗し
みえられさりけりまことに人をよ勝
こりしめんとおもひてもなほ心にあるその
無為なるへし人にあらはすへからすをもて我心

をすてさめんにまた無にそむかうとしかれ
しる中に手つからさ人をいふかあ
さむかりもなのかまとり額のまへのをまへ
本を無くれ之文れにあらは作を
りしあ第に云んとかおそろしておそれ
らるゝとひとふそこのわかけ是
みなあらそひのこゝのしたしく人に勝ん
ことはあらて六芸をんしてこそ熟成
人まにのさんとおもふへし道をまなる
伊とのうは昔小わかひとをへしる

あしき人はこれをいつはりありとて人をさ

おしえつゝ織をも緯し利をもとを

はかりは其等同のちからや

りのよわきそしれ　曲礼ニ在レ醜ニ不レ争

論語ニ君子ハ無レ所レ争

さのまゝをまもりて　老子ニ云曲ハ則全シ

枉ハ則直シ丈レ唯不レ争故ニ天下莫レ能ニ

与レ之争フ

我身を後にして　論語ニ仁者已レ欲レ立ント

而立レ人ヲ已レ欲レ達ト而達スレ人ヲ老子ニ云欲レ先ンセント

民ニ必ス以テレ身ヲ後ニスレ之ニ　又云不ニ敢テ為ニ天下ノ

先ト一故ニ能ク成ニ器ノ長ト一

とりまして中に多いつくしを　張子

厚カ東銘ニ戯言ハ出ツ於思ヨリ也戯動作ル於

謀ヨリ也

人よきことまねんとせんにて

之指屈而不レ信　孟子ニ云無名

心不レ若レ人則不レ知レ悪此之謂レ不レ知レ類

也又云不レ能レ不レ若レ人何若レ人有　中庸ニ

云子曰射ハ有レ似レ乎君子ニ失ニ諸正鵠ニ反

来諾こたふ

若ふかくし　論語曰称ハ无二代一若ニ

たすつ職　孟子説ケイの経を辨し

万諜の禄をうけて一百のけんきんを

とらさるの数し

まつ貴老ハ賤をもちて礼し老

たる者ハ力をとけて礼とほその合

をしつて及ハいつらされハともやうり

後しと言といふへしゆゑさらん人ハ衆

あやまりなりなとおもひしそして古み

てえらしハそのまゝおやまつらしまけ

してたとへはいされハ道ちかくもつれ

とらへて合をたすされハ二備ふへし

貪しきものハ　曲礼云貧者不以貨財

為礼老者不以筋力為礼

為羽の外ハ島羽を立てられて

後世定ハあやしきやうの名あり元

良親王元日の奏聖の声とられてけ

勝ふして大徳を立る島羽の外の道を

てうんつるまし李部王の記に伝ると

や

鳥羽殿　白川院応徳三年立ニ鳥羽殿ヲ

元良親王　陽成院の御子

元日奏賀の声　奏賀はよろこひ申なり

大極殿　拾芥云大極殿朝堂院正殿名ニ
八省院又云八省院天子臨朝所位諸
司告朔所又謂之中臺ト

李部王　延喜御子式部卿重明をいふ
の親王しきふきやうを唐名に吏部李部王
ともいふなり式部を吏部といふは式
部を吏といふなり行理行吏行
李の字みな通用なるよし内書にも
見えし左傳正義にみえたり

紫の朱　紫は東の花也赤は南と
まじはりて満氣也しるしへ論語に孔子
も東首しるへしといへる論語の心也武は

南殿　宮の前ほし白川院は小前より御
てんなりくわへいかまのうへよ
いましく北野宮の宮前へ侍まけ
あつかひをとくはる北野宮の

遺釋へはいつも西に向ひ給ふ南よおもし
東枕し　礼記云寝对東首孔子も
東首し給ふ　論語郷黨篇云疾
君視之東首加朝服拖紳　朱子
注云東首以受生気　新安陳氏
曰天地生気始於東方或問疾君
視之方東首常時首當在那邊
礼記自云寝常當東首矣平時
亦欲受生気恐不得於疾時為然
朱子曰常時多東首亦有隨意所

時節如記云請席何向請衽何趾
這見得有隨意向時節然多是
東首呂氏玉藻云君常戸寝常東
首也常寝於北牖下右問疾則移
於南牖下

高倉院の法花堂の三昧僧なにかしの
律師とかやいふ者或時鏡をとりて顔
をつくづくと見て我形のみにくゝあさ
ましき事をあまりに心うくおほえて鏡
さへうとましき心ちしけれは

いそのらすく後をもてなされてよみ
くにとくす文人み御しつ本もし
御書れはしめそこかふあめて叢ぬ
くらさや仰しくつるくくえしつ
めしうけすへともへのへとのよくつ
つそて女のまとはえくくるくし秋とし
らもしく永とあつとい人しくろつる
色くしは宮へとなくとあつとおとし
まうへとひろへしめくらかへくるれとも
紀のを母なくすゝなともえしは蔵えん

はくすくなくしは男乃桜すくつと
ともしは華のむつかとをもしは稲
乃をとをもとをしくしは秋のちる末
まなとも衣をあたこすふ冬のいふきつ
乃かとをしは男衣と乃秋とそう
猿へはまつしのそうとあくしは紀
くらいうかへしみ雨華はうくへてえ
多秋男乃くつしいあつ○とき
つ求くれすされへえつゝよ游くつと
ちいを御しくもくとあつかまつひ

とはくやよくよはあはれはくるすれと
あはれなりかくやてありくらさ御花
めくあはれなりしつにゆきと安く
せきの思ふゆくあはれなりゆきと
おりなくてまよかくさ御をへてへり給
女にやうれとして和よまし給うさ御て
くらつ人まくてとなれりてわつく
女房のして大事ふまいりのる御母乃慶
とりて御殿乃御はすくるの雲井?
しらくといくまてさうらへり

ひいちんや及ハさ御まくとはこそ
ぬまくとくへまくさ御のおはし
そりもくまんへり[illegible]おハ人乃あとき
取しゆかれしさ給の山ししれてこそ
こゝもくとそつしひしゝさかりま
れやまのさらハ命にはおうるへての今そ
ふこさくらのと年のにきこえれいあり

高倉院　後白河院第三御子

三昧　此云調直定又云正定又云正受

主峯ノ疏ニ云不ル受諸受ヲ名テ為ス正受ト遠

法師云夫稱三昧者何專思寂想之謂也思專則志一不分想寂則氣虚神朗氣虚則智恬其照神朗則無幽不徹斯二乃是自然之玄符用一而致用也　天台止觀略明四種三昧一常坐二常行三半行半坐四非行非坐云四種三昧皆依實相實相是安樂之法四緣是安樂之行一部以始末皆依法花即法華三昧之妙行也　翻譯名義集詳也

鏡とりて　三國志　魏夏侯惇從征呂布爲流矢所中傷左目時夏侯淵与惇爲將軍軍中号惇爲盲夏侯惇惡之毎覧照鏡恚怒輒撲鏡著地　白樂天感鏡詩今朝一拂拭自照顏頳容照罷重惆悵背有雙盤竜　許渾詩高歌一曲掩明鏡昨日少年今白頭

人ハ色とのみとりて　論語学而篇
不患人之不己知患不知人也　注尹氏

曰君子求在我者故不患人之不己
知不知人則是非邪正或不能辨故
以為患也
むかしもいまもかはらぬよ　人生待足
何時足未老得閑方是閑
富めりしか　古今よ
よしの日ものしらしあらかられし
しらぬもなにかあるへき
高蟾詩人生莫遣頭如雪縦得春風
亦不消

資季大納言入道とかやきこえける人具氏
宰相中将にあひてわぬしのとはれんほと
のことなにことなりとも答申さゝらんや
といはれけれは具氏いかゝ侍らんと申されける
をさらはあらかひ給へといはれて
はか〳〵しき事はかたはしもまなひしり
侍らねはたつね申すまてもなしなにと
なきそゝろことの中におほつかなき事
をこそ問奉らめと申されけり
まして爰もとのあさきことは何事なりともあ

こゝのゑさんといひけるまことへ大納言公
女房なりし也　具房のあるひはまつむまし
くれ門前にてわかきりしをまゐらせん
人は法師となりまゐらせしことのちに
てふるてめしわかれせられさうらふけれ
小具氏おさなくしていらせかしのゆかりと
つきものしたしかりし馬のこさいりつや
うこさりはのおとゝ中将まへいひつれん
とうしとやしてはいろいろのよい事からんそ
らんとやまされたる大納言入道としてはた

まいりてそのへいそくつくされたりいへるを
あらきものはいされなからのとりとりうめ
りたる道へしつまるゆかしそくつくしと為
さてまいらんとてあやつしてやされ
それはたてまつらん入道もまゐらせまいらせて
不深いふめしくせらるさうらふなと

資季大納言　法興院摂政兼家公末
孫号ハ楊梅ト
具氏宰相中将　村上源氏通方ノ孫
通氏卿ノ子

ヨみし　詮し昔の字をとりはなして
人をさして菩子と云を此後し俗に
おゐてと云なるへし
御前にて　院の御前し　かきまいらせ
仏をまいらせ候
ぬるゝはかなしき
馬のこゝろのやうに　遊行をすゝむ人の云
はなる人なるやうにいふをおもふ
そてもえ目をいたして行けり
色々にめてさせし

一 而深　深はふかしとよみてその不思
議をしおもふを云あらはしてへつけたり
まねて申すものをせられけり
くましわつちをも法皇の御前ようご
らめて仏乃まらせ候ひは遍まへ
つけ仏の色々を文字を功徳を
さつ下され候ひ仏ひは本家
よめ給ひしあくせられ給へし引門
ともおやまつりしとも申す時しを
金剛般若の所ましつ後て有房つゐて

みゆきの御かんよくえらひいはゝ文
字ハいりきの篇より御かんとされた
つらぬるみ玄篇よいとやうそうり給はゞ
此おしまてみおつされみそうり今さ
さへらてらへゆしきところすきと
やゆきぬるよとよみんりすりてゐる
いてよろう

故法皇　花園院号萩原法皇ト
本草　神農のしめてはしめるる梁
陶隠居先をとし唐宋の傳醫代々

菜わり

六条の前内府有房　後一位内大臣和漢
の才能書し　村上源氏通光公孫し
ちかと云文字
鹹也　鹵鹽　韻会鹽余廉切說文
鹵也　古者夙沙初作煑
海鹽徐曰黄帝臣也　集韻或作鹽
鹽俗作塩非是監居銜切从臥䀇首
聲臥五貨切伏也从人从臣取其伏也人
臣事君俯僂也
いつきの編　文字のかんはくらといふ

附偏旁ごとし

とよりはなりてとくへ　さりとゝされ

ていろいろし響をとゝもしてあり

枝葉よりのきこえしあしのきの

やまとよりん康のなりら集

粗人ハ文章をかくしめし紀貫之

山花やのこ本とよしあり

110X
516
4